声 VOICE

観光を支える方々の声を寄稿、インタビューを基にお届けします

光を観る旅―能登で見つけた生き方

自分の居場所探しが観光の醍醐味

キャリアコンサルタント
新井（五十嵐）恵美氏

昨夏、亡くなった祖母の遺品を整理していると1994年に祖父母が東京から能登を訪れた際の写真が出てきた。老舗百貨店が企画したツアーで輪島キリコ会館と千里浜を訪れた時のもので、少しすました表情の祖父母が写っていた。

昨秋、私はそのキリコ会館を訪ねた。そこには2年前の元日発災当時のままの姿があり、自然の力の脅威を静かに物語っていた。

私が初めて能登を訪れたのはちょうど昨春「もう能登に来ていいって！」「能登と友達になってください！」という声に導かれてだった。ゆえに私は、震災前の能登を知らない。祖父母が当時味わった能登の美食や、そこに流れていた空気を想像しながら、震災を経て生まれる、新たな能登の姿を一人思い描くのであった。

報道にもあるようにいくつかの宿泊施設は営業を再開。地震と大雨で一時は通行止めだった県管理道路も、昨秋には13カ所を残すまでに復旧（25年10月石川県発表より）している。訪問を重ね、能登で暮らす方々との会話から、一人一人の復興の物語が見えてきた。

と同時に、ここで暮らす人々に共通する価値観にも気づかされた。それは、自分より周りの幸せを優先する能登の人々の生き方だった。

「能登はやさしや土までも」という言葉がある。実際に訪れて、この言葉の意味を深く実感した。震災で物理的な観光地の姿は変わったが、復興の途上にある今もなお、ここにしかない営みと人の温もりが息づいている。

祭りを支える人々の熱量、季節と共に移ろう風景。その一つ一つに触れるたびに能登の魅力を五感で感じる。人と風土に触れる中で、〝自分にあう場所〟で自分らしく生きることの尊さに気付かされた。

そんな「自分の居場所探し」が、これからの観光の醍醐味（だいごみ）の一つになり得ると感じている。人生100年時代と言われる今、多様な生き方が広がるなかで、人生の第2章、第3章を過ごす場所探しの旅があってもいい。

美しい景色や美食だけではなく、その土地の「真の豊かさ」や「人々の営み」に触れることを通じて、自身の生き方を見つめ直す機会を提供できるかが、今後は問われるのかもしれない。

能登の未来に光を観る新しい「観光」の形が、地域の活性化へとつながっていくことを願いながら、私自身もその一助となれるよう、今後もできることを続けていきたい。

「教育旅行×地域探究×交流」の勧め

社会変化に対応する学びの機会と地方創生

一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構
グリーン・ツーリズムチーム長
花垣 紀之氏

観光とは「国の光を観る」ものといわれるが、今こそ子供たちのために観光の役割が期待される。

人口減少、地方の過疎化、気候変動、AIの普及等の技術革新等に伴う社会構造の変化が進行し、子供たちは今後生じるさまざまな激しい変化に対応していかなければならない。

「令和の米騒動」と呼ばれる米の価格高騰も、原因は何か、これまでが安すぎたのか、この現象はこれからも続くのか、国だけでなく生産者や流通業者等のさまざまな見解があり、その解決は容易ではない。

こうした社会的な課題を解決していくにはさまざまな立場や多角的な観点から探究していく姿勢は欠かせない。

文部科学省では、平成29年度から段階的に「学習指導要領」を改訂し、各校に新たに求めたのが「探究的な学習」である。

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にする授業である。

「探究的な学習」を「教育旅行」と組み合わせて実施する学校も現れている。

昨年、都内の私立高校からの相談を受けて、米の生産・流通に関する事前学習、福島県に訪問して水稲を大規模に生産している農業法人の講演・視察と3日間の農家泊、生徒間によるふりかえりの機会づくりに関わった。

参加生徒の感想を聞くと、AIによる情報収集では得られない生産者の事情・状況・苦労等を肌感覚として体感し、消費者と生産者の双方の立場で考える等、今回の課題をより自分事にして探究できたようである。

「教育旅行×地域探究」の活動では、訪問地の社会的な課題に向き合っている「地域人材」との交流・対話の機会が欠かせない。地域人材が教材であり、学校が訪れる理由になりえる。

大規模校の活動の場合、1学年200名前後の対応が課題になるが、広域連携を図って、受け入れ先を分散させて取り組む事例もある。

一期一会の交流が子供たちの考え方や進路に影響を与えることがある。私は30年以上、訪問地の家庭で寄宿する「教育旅行民泊」を普及してきた。参加者の中には、受け入れ家庭との継続的な交流（手紙・再訪・結婚式への招待等）、訪問地への観光・移住・就業を図った方もいる。

教育旅行を通じた地方創生。地方にとって「地域の光を観る」展開につながることを期待している。

人財育成を軸に「共創の輪」広げる

独自性を磨き、人財とDX・AXで切り拓く宿泊業の真価

全日本ホテル連盟常任理事／更紗ホテルズ取締役統括本部長
北原 信輔氏

2025年の訪日外客数は過去最高を記録し、観光業界はかつてない活況に沸いています。しかし、私たちはこの数字に安住してはなりません。足元では特定国からの訪日自粛といったカントリーリスクが浮き彫りになり、特定市場への依存からの脱却と、安定的な集客構造の構築が急務となっています。未曽有（みぞう）のパンデミックを経て露呈した人手不足や低賃金という構造的課題を、改めて見直すべき時がきています。

制御不能な外部環境に翻弄（ほんろう）されたからこそ、私たちは反転攻勢を見据え、自社の「高収益化体質」への変革を断固として実行する好機を得たと言えます。この変革の成否は、未来の利益を生み出す源泉である「人財」への戦略的な再投資にかかっています。

私たち宿泊事業者は、人件費を「コスト」ではなく、「未来の価値を創り出す投資」と再定義しなければなりません。離職率の高さや若手リーダーが育たない実情は、教育制度の不在や、働く人が職業的価値に誇りを持てない環境に起因します。生産性向上と賃金水準の適正化を両輪で進め、人財育成プログラムと世代を超えた交流環境を整備し、真のホスピタリティを発揮できる組織を築き上げることが、今すべての経営者に求められています。

この人財投資を支える強力な武器が、DXやAX（AIトランスフォーメーション）への取り組みです。最新技術による業務効率化や価値の再構築は、単なる省力化にとどまらず、スタッフがより付加価値の高い人的サービスに専念できる環境を生み出します。

特に業界の大半を占め、かつ業界を支える存在である中小ホテルは、自らの「独自性」を磨き抜く必要があります。私たち一般社団法人全日本ホテル連盟としても、「観光立国の実現と地域の活性化に寄与する」というミッションのもと、タウンミーティングをこれまで松本市を皮切りに福井市、金沢市、北上市、幸手市、福山市で開催してきました。こうした「共創」の場を通じ、自社単体では完結しない地域一体となった体験価値を創造していくことが不可欠です。

また、国や行政には、最前線のスタッフの処遇を厚くし、かつ育成を強化するための政策的な支援を要望します。中小事業者のDX・AX推進や人財育成への継続的な投資こそが、観光立国実現の揺るぎない土台となります。

私たちの業界の価値は、私たち自身の手で向上させるべきです。これからも、人財育成を軸とした共創の輪を広げてまいります。

道の駅から広がる地域観光

農泊と文化で魅力発信

株式会社田原観光情報サービスセンター
専務取締役　長神 利行氏

株式会社田原観光情報サービスセンターは、平成3年に地域の商工会・農協・漁協が出資し設立された会社です。以来30年以上にわたり、地域に根ざした観光拠点として活動してきました。現在は渥美半島・田原市内の三つの道の駅の指定管理を担い、観光案内や旅行企画、地域産品の販売など幅広い役割を果たしながら、地域の魅力を発信しています。

愛知県の南端に位置する渥美半島・田原市は、全国有数の農業王国です。温暖な気候と豊かな自然環境を背景に、花や野菜、果物の生産が盛んであり、市内最大の道の駅「田原めっくんはうす」には、早春のイチゴ、夏のメロン、全国有数の出荷量を誇るキャベツやブロッコリーなどを求めて、県内外から年間百万人以上のお客さまにお越しいただいています。私たちはこうした来訪者と地域をつなぐ拠点となるため、産直販売にとどまらず、6次産業化による商品開発や旅行事業の展開など、常に時代に応じた新しい挑戦を重ねてきました。

近年は、観光庁から地域DMO（観光地域づくり法人）として認定を受け、さらに田原市農泊推進協議会と田原市文化遺産地域活性化実行委員会を立ち上げ、地域が主体となった観光まちづくりを進めています。農泊推進協議会では、地元漁師や農家と協力した体験プログラムの造成、訪日外国人に向けた貝食文化紹介リーフレットの作成、あさりの押し寿司（ずし）の商品化などを実施し、「食と農」を体験するプログラムを磨き上げてきました。一方で、文化遺産地域活性化実行委員会では、田原凧や田原まつりといった地域の文化資源を観光コンテンツとして活用し、「文化を通じた誘客」を目指しています。地域の人が主体となった農泊と文化の両輪で渥美半島の魅力を発信しているのです。

コロナ禍があけて、渥美半島への来訪者数は回復基調にあり、道の駅の売り上げや利用者数も増加しています。一方で、運営体制や人材育成、安定財源の確保といった課題は依然として存在します。だからこそ、地域住民・行政・事業者が一体となり、持続可能な観光の仕組みを築くことが不可欠です。

地域主体の観光まちづくりは、訪れる人にとっては地域の食や文化、暮らしに触れる感動をもたらし、住民にとっては地域の誇りを再発見する機会となります。私たちは今後もその一翼を担い、「地域資源を磨き、地域の皆さんが主役となる観光」を推進し、農泊と文化を軸に国内外から選ばれる渥美半島の実現を目指してまいります。

文化がつないだ400年

寛永行幸四百年祭に寄せて

京都府文化生活部副部長兼文化政策室長
（寛永行幸四百年祭実行委員長）
梅原 和久氏

今から400年前の寛永3年（1626年）、江戸時代を通じて最大級の行事「寛永行幸」が行われました。徳川2代将軍・秀忠と3代将軍・家光親子が、後水尾天皇を二条城に迎え、5日間にわたりもてなしたこの行事は、戦乱の時代を経て、文化を通じた安定と交流の時代が到来したことを象徴するものでした。

二条城では、天皇を迎えるために大規模な改修が行われ、最高の材料と技術を尽くした御殿や新たな天守が築かれるなど、その準備は2年半にも及びました。行幸当日には、全国各地から集まった大名や公家など、総勢9千人ともいわれる人々が、その日限りの晴れの装束を身にまとい、御所から二条城へ向け行列をなしたと伝えられています。この華やぎは「寛永文化」と呼ばれる洗練された様式へと結実し、日本各地の芸術や人々の暮らしに大きな影響を与えていきました。

今年、寛永行幸から400年を迎えるに当たり、京都府・京都市をはじめとするオール京都の体制で実行委員会を組織し、「寛永行幸四百年祭」を実施します。本事業の目的は、単に過去を顕彰することにとどまらず、400年前の人々が大切にした文化の力や交流のあり方を、現代の暮らしや観光の姿と重ね合わせて捉え直すことにあります。12月6日に実施する行幸行列の再現をはじめ、複数の博物館・美術館での展覧会、能楽の公演など、学びと体験の場となるさまざまな催しを通じて、訪れる方々が京都の歴史の奥行きに触れることができる機会を創出したいと考えています。

文化という目に見えにくい価値を丁寧に伝えることは、滞在時間の延長や再訪につながり、ひいては地域経済を支える力にもなります。400年前、文化が人の往来と交流を生み出したように、寛永行幸四百年祭が、再び人の流れと新たなつながりを生み出す契機となることを願っています。

また、この事業は京都だけで完結するものではありません。寛永行幸に参加した大名たちが、京都で触れた文化を各地へ持ち帰ったように、本事業を通じて全国の地域文化や観光関係者との新たな連携が生まれることを期待しています。併せて、各地で育まれてきたこの時代の文化に改めて光を当て、相互に学び合う機会としたいと考えています。

文化は観光や経済の基盤となる重要な資源です。文化庁の京都移転も踏まえ、京都府としても、事業者や地域の皆さまと連携しながら文化を生かした観光のあり方を模索しているところです。本事業が、京都の歴史を手がかりにこれからの観光や地域づくりを考える、ひとつのきっかけとなれば幸いです。

魅惑の東京臨海副都心（お台場）

コンパクトかつ効率的なMICE開催を支援

DMO東京 台場・青海・有明
事務局長　中林 久則氏

『東京臨海副都心（お台場）』に対して皆さまはどんなイメージをお持ちになっていますでしょうか？

フジテレビ本社屋の球体や海辺のレインボーブリッジの眺望でしょうか？

東京臨海副都心は新宿、渋谷、池袋などに次ぐ東京都が指定する7番目の副都心です。都心から6キロメートル圏内という場所に位置し、羽田空港・成田空港の両空港からもアクセスが良く、ゆりかもめやりんかい線またBRT（バス高速輸送システム）など交通インフラも充実しています。東京2020大会では主要な競技会場として利用され、プレスセンターの機能としても役割を果たしました。ここ最近では次世代モビリティサービスが開始され、長年の課題でもあったエリア内の回遊性も向上しています。

442ヘクタールという広大な土地に「シーサイド・商業ゾーン」の台場、「研究開発ゾーン」の青海、「コンベンションゾーン」の有明南、「東京2020大会のレガシーを引き継いだ複合拠点ゾーン」の有明北と、それぞれ特徴のあるエリアがバランスよく位置付けられています。

そして年間を通して未処分地や海上公園などではたくさんのイベントが開催されており、特に12月は毎週土曜日とクリスマスイブに5分間ですが、約1300発の花火が打ち上がる「お台場レインボー花火」はこのエリアの冬の風物詩となっています。凛とした冬の夜空にダイナミックな華が咲き、年末のこのエリアを幻想的に彩ります。

昨年の10月には青海にプロバスケットチームであるトヨタアルバルク東京のホームアリーナとして1万人収容可能な「トヨタアリーナ東京」が開業となりました。今年3月には有明南にて劇場やホールを兼ね備えたテレビ朝日の「東京ドリームパーク」が開業となり、青海・有明が新しい顔を見せ始めます。さらに3月末にはお台場海浜公園に東京都が整備する世界最大級の噴水が完成予定となっており、このエリアの新しいランドマークが次々に誕生します。

そして臨海副都心は日本最大の展示場である東京ビッグサイトを代表としてホテルや商業施設などのMICE機能保有施設がとても充実しています。また、他エリアと比較してバラエティに富んだ、プライベートパーティーが開催可能な屋内型テーマパークなどのユニークベニュー施設がとても多いことが特徴と言えます。施設同士の強固な連携によりコンパクトかつ効率的なMICE開催が可能であり、皆さまにご満足いただけるサービスが整っています。公私どちらの場面でも楽しんでいただける臨海副都心（お台場）をどうぞご利用ください。